

アートとコミュニケーション(続)

— アートアプローチ「えほんをつくる」に見るものがたりの生成プロセス —

Art and Communication

Generation process of the story in the art approach “make a picture book”

保 高 一 仁

Kazuhito HOTAKA

【キーワード】 アートアプローチ 美術教育 ものがたりの生成機能 不可知性 えほんをつくる

1. はじめに

著者は前稿において、制作物に制作者自身にとっての不可知性が内包されうること指摘した。ここでいう不可知性とは、表現内容の一部をなすものでありながら、それ自体としては記録されない表出を指す。それは、あらかじめ想定していた制作物の制作プロセスや、その完成イメージではなく、当初の企図を超えて、なおも表出されてしまうものことである。多くの場合、それは必ずしも他者への伝達を目的としない表出である。自身の表現展開のための見立てのようなもので、プリミティブな象徴生成と同根のものであると考える事もできる。これらは実体を持たないがゆえに、制作後のふりかえりを行ってはじめて、自身の内面に制作活動とあいまって生じた言語活動や象徴生成が“確かにあった”と明確に意識することができる場合もある。

ここで提起されるのは、制作物の表面に物理的には定着されなかった表出を指導者はどう扱うのかという問いである。制作物の評価を制作物だけに依存したとき、指導者は表現の総体を推測するための物理的側面しか与えられないことになる。通常であれば見落とされてしまう内的活動を汲み上げ、それをも制作物として扱っていくためにはどのような手法を取りうるのか。

この問題意識に応える実践として、著者はアートアプローチ手法「えほんをつくる」を考案した。本稿では、同手法のより詳細な手順と実践例を紹介したい。

2. 倫理的配慮

本研究を行うにあたって、本学学生と著者が運営する絵画教室の生徒よりヒアリングと作品写真提供の協力を得た。倫理的配慮として、協力者、協力者が幼児である場合はその保護者に対して本研究の目的、本調査への協力は任意のものであること、調査で得られた内容は本研究以外の目的で使用しないこと、個人を特定しないことなどを説明し、同意を得た。

3. アートアプローチ手法「えほんをつくる」の特徴とバリエーション

前稿では、アートアプローチ手法「えほんをつくる」の基本的な手順について触れた。ここで、同手法の特徴を再度整理し、バリエーションを紹介したい。

同手法は、様々な形・色をした紙片を何かに見立て、長くつなげられた紙の上に貼り付けていくことで、「どこかへ出かけていく“ものがたり”」をつくることをひとまずの目的としている。ここで「ひとまず」としたのは、同手法による最終的な完成物を、事前に想定することが制作者本人にとっても難しいからだ。「どこかへ出かけていく“ものがたり”」というのは、活動を開始するにあたってのひとつの教示にすぎない。この手法は見立てあそびを応用したものであるが、参加者によってはより高度な象徴表現へと展開していく。教示をあえて漠然としたものにするすることで、表現の自由度の余地を確保したいと考えたためであり、結果として教示と異なるような展開となることはしばしば見られる。

台紙となる画用紙は蛇腹状になるよう複数毎がテープでつなげられている。こうすることで、単なる平面ではなく、ページがめくれるようなかたちになり、時間・空間の移行や、転換、飛躍の表現を誘発しやすくしている。制作終了後の振り返りの時間、参加者にはそれぞれの作品を広げてもらい、どこに出かけたのか、どんなものを見てきたのかを話してもらう。ここで語られる“ものがたり”は、因果律によって支配された筋書き—STORYと訳されるころのものではなく、ものがたりを語る本人の企図を超えて語られてしまうものなものである。

〈基本型〉

特徴

あらかじめ切り取られた紙片を貼り付けていくだけで良いので、技量面からの問題はほとんど起こらず、即興的に作業を行える。

適応

おおむね3歳から

準備物

- ・八つ切り画用紙…4枚程度（八つ切り画用紙は横に4枚程度つなげ、蛇腹状になるようにテープで固定しておく。※写真1）
- ・色画用紙…数色（色画用紙は、それぞれ様々な形状になるよう切っておく。写真2）
- ・はさみ
- ・のり

環境設定

- ・任意の場所にあらかじめ多数の色画用紙の紙片を置いておく。

教示例

（色画用紙の紙片の置き場を指して）

「いろいろな色や、形をした紙がたくさんある」

「好きな形や、好きな色、気になった形があればいくつでも拾っておいで」

（台紙となる画用紙を渡して）

「すごく長い長い紙だよ」

「これからここに、今拾ったいろんな形の紙を貼り付けて行って、えほんにしよう」

「まず、スタートのおうちをつくろうか」

「（広げた画用紙の上を、2本の指で歩く仕草をしながら）どこかへ出かけてみよう」

経過

1枚目の紙片を蛇腹状の画用紙の表紙にあたるページに貼り付けてもらう。2枚目以降は、参加者のペースに合わせ、声かけが誘導的なものにならないよう注意しながら見守る。介入は、ページをめくる時や、のりの分量の調整程度に留める。必要に応じて、追加の紙片を拾ってくるよう促す。制作中に発せられた発話や独語は記録しておく。

〈自由型〉**特徴**

色紙をあらかじめ切っておく事なく、制作者が自由に色紙を切ったり、描画材で描き込みをするなどする。作業内容の自由度は向上するが、制作活動に対する苦手意識をもつ者は難易度が高いと感じてしまうかもしれない。

適応

おおむね6歳から

教示例

（色画用紙、描画材を指しながら）

「ここにある材料を使っていいよ」

「これで、どんなものでもつくっていいよ」

〈行きて還る型〉**特徴**

まず最初に、自分自身の家を作り、表紙に貼付けるよう教示する。このことで、“ものがたり”のはじまりが明示されることになるとともに、“ものがたり”の帰結としての場所を作る事ができる。蛇腹状のページをめくり、最終ページになったところで、そのまま裏表紙からめくり続けると、最初の表紙に戻ってくる仕組みになっている。円冠状の閉じた構造であり、このことが“ものがたり”の枠組みとして機能し、心理表出のリスクを低減させるとも考えられる。自由形との組み合わせも可能。

適応

おおむね6歳から

教示例

（色画用紙かその紙片をさして）

「まず、自分のお家を作って、表紙のページに貼ろう」

「そこから、玄関をあけて、出かけていくよ。」

（ページをめくり）

「そしてまたお家に戻ってきます」

在中

4. 実践例

以下に、同手法の実践例をを挙げる。鍵括弧内は制作終了後の振り返りの時間に語られた“ものがたり”である。

○実践例1 〈自由型〉 ※作品1

（6歳 女兒）

「ペンギンがいて、ペンギンに魚をあげて、それで、お花の形のトランポリンを飛んでいて、それで、急に、なんかヒューってこっちにいて、それで、寝ていて、で、起きていたら花のにおいがして、それで、目が覚めて、それでテクテクテクって行って、それで、迷路があったからヒューヒューヒューヒューって行って、ここがゴールで、それで何か、何か、こうやってピューって飛んで、それで、わたあめのところ、雲のわたあめにいて、それでわたあめ食べて、それでお腹いっぱい、それでテクテクって歩いて、それで、えーと、ふたりでお菓子を食べて、それで、えーと、わたしの家にいて、それで、テクテクって行って、お花をとって、それでお花をもらって、それで、えーと、抽選会にいった。」

○実践例2 〈自由型〉※作品2

(19歳 女子学生)

あるところに太陽から、妖精が生まれて、妖精が落ちこちちゃって、コロコロ転がっていくんですよ。どんどん転がっていったら、ここに穴があって、穴に落ちちゃうんですよ。そうしたら、落ちたら、何か、いろんなものがくつつく世界に入っちゃって、そう、丸とかがくつつく世界に入っちゃって、で、戻ってくる。最後がよくわからない。でも、最後に慣れるの。子どもが冒険をして、この子は太陽の子で、いろんな世界を見て冒険して、結局太陽になれる。



○実践例3 〈行きて還る型〉※作品3

(20歳 女子学生)

ちょうちよがお家において、チョチョチョチョって行って、お花とかの原っぱを黄色いちょうちよが飛んで、パタパタって行ったら、川があるところに出て、川の上を飛んでいたら、黒い穴があって、そこにちょうちよが導かれるように入っていくんですよ。で、そうしたら、何かよく分からない世界になって、丸がいっぱい。不思議な世界に入って飛んでいったら、また黒い穴があって、そこに入っていったら、ぱたぱたって飛んでいったら、お家に戻る。



○実践例4 〈行きて還る型〉※作品4

(20歳 女子学生)

丸い人がね、お散歩。丸い人がお散歩にいきたいなって、遠くにいきたいなって思って、家を出て、森にたどり着いて、木の実を持って、それを食べながら次の場所に行くんです。そうしたら月が昇ってきて、で、月に挨拶をして、次の所に。で、そうしたら大きな海があって、魚たちが一緒に飛び跳ねていたから、一緒に遊んでみて、もうちょっといったら、すごい火山があって、暑かったから、急いでお家に帰るんです。



○実践例5 〈行きて還る型〉※作品5

(20歳 女子学生)

こいつが、一応、この自分の家から歩いて出て行って、まず、靴を見つけて、歩いていたら、靴を履いて歩いていたら、帽子を見つけて、で、帽子を見つけてまた歩いていったら、今度、扉があって、扉を開けたら矢印があって、矢印の方に進むと、飛行機と出会う、で飛行機に乗って、家の上まで来て、落ちたら、靴と帽子が飛んで、元に戻った。



5. まとめ

アートアプローチ手法「えほんをつくる」は、“ものがたり”をつくることを目的としている。しかし、そのプロセスは美術的な手法であり、かつ、個々の造形技量によるところが少なくなるよう配慮している。実践例で見てきたような“ものがたり”は、最終的な成果物であるものの、それがどのようなものになるかを想定することは、制作者にとっても難しいものであった。しかし、〈行きて還る型〉に見るような閉じた構造が心理的表出の枠組となると考えられる。

参考文献

保高一仁. アートとコミュニケーション. 松本短期大学研究紀要第24号. 松本短期大学, 2015, pp33-39.